

柳<sup>やなぎ</sup>  
谷<sup>たに</sup>  
和<sup>かず</sup>  
美<sup>み</sup>

トラウマとともに、自分らしい生き方を見つけるまで

くサバイバーが語る性暴力・DV・虐待



## プロフィール

「おやこひろば桜梅桃李」代表、心理カウンセラー、親子カウンセラー。幼少期の性暴力被害や虐待、デートDV被害、孤独な子育て、子どもへの虐待、うつ、アルコール依存、離婚、子連れ再婚を経て、二〇〇六年カウンセラー資格を取得。自身の経験から、クライアントの「命の輝き」をどこまでも信じ抜くカウンセリングを行っている。子どもも親も、加害者、被害者にならない子育てを伝える講演会は泣いて笑って癒やされると好評。また、性暴力、DV、虐待問題にも積極的に取り組んでいる。

○司会 ただいまより二〇二一年度講座「生きること」の第四回を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。

さて、本日の講師、柳谷和美さんのプロフィールをご紹介いたします。柳谷和美さんは吹田市にあります、おやこひろば桜梅桃李（おうばいとより）の代表であるとともに、心理カウンセラー、親子カウンセラーでいらっしやいます。プロフィールにもございますように、幼少期に性暴力や虐待を受けたことから自尊心が低く自暴自棄な思春期を過ごされ、その後もデートDV被害、孤独な子育て、子どもへの虐待、鬱、アルコール依存、離婚、子連れ再婚などを経験されたとのこと。しかし、子育てカウンセリングを受けたことをきっかけに、「私は私のままでいい」と自分を認められるようになり、当事者として苦しみを知っている私だからできることを伝えようと二〇〇六年、カウンセラー資格を取得されました。ご自身の経験から、クライアントの命の輝きをどこまでも信じ抜くカウンセリングを行っておられます。また、子どもも親も加害者、被害者にならない子育てを伝える講演会は、泣いて笑って癒やされると好評。性虐待、DV、虐待問題にも積極的に取り組まれ、その活動はテレビや新聞にも取り上げられています。枚方市でも男女共同参画の情報誌の作成にも携わっていただいております。

それでは、柳谷さんにご講演いただきます。皆さん、拍手でお迎えをお願いいたします。（拍手）

○柳谷和美 皆さん、こんにちは、どうも。お昼ご飯の後でちょっと眠たくなっているかと思

ますけれども、元気いっぱいさせていたきたいと思えます。私、柳谷和美と申します。

「トラウマとともに自分らしい生き方を見つけるまで」サバイバーが語る性暴力・DV・虐待「、自分で言うのも何ですけど、こんなおどろおどろしいタイトルの講演にようこそおいでくださいまして、ありがとうございます。タイトル自体は重たいです。実際に私が体験したことも、途中にちょっと重たい話があるかもしれませんが。でも皆さん、安心してください、今日は帰るときに元気になってもらうように一生懸命、精いっぱいお話しさせていただきますので、よろしく願います。

それでは、早速始めていきましょう。今日、皆さんのお手元に私から文字ばかりが詰め込まれている資料を配付させていただいております。こちらはふだん私が親子カウンセラー養成講座や性教育インストラクター養成講座という、私が主催している講座があります。それぞれ配付しているテキスト資料の大事なところを抜粋して、皆さんにぜひ持ち帰っていただきたいなど、何なら一生大事にできるぐらいの情報を詰め込んでおりますので、講座が終わってから見ていただけるような内容になっています。ですので、今日は講座の間は、私を見てみたいな感じで聞いていただければと思います。

ありのままの私ということで、子どもに関わる皆さんとか、特に支援とかに関わる方なんかへ何かしらのヒントになればと思って、暴力・虐待・DV被害当事者としての体験を中心にお話をします。被害の話をするとき私、あんまりオブラートに包みません。性器の名前とかセックス

だとか何だとかいう言葉、直球でお話しさせていただきます。気分が悪くなったり、しんどくなったりした場合は、遠慮なくちょっと伸びてみたり、大きく息を吐いてもらったり、お手洗いに行ってもらったりしても全然構いません。途中で眠たくなったら寝てもオーケーです。

—なぜ、四十八年も前の事を覚えているのか？—

うちの家族を紹介しましょう。夫は四十九歳、長男は三十歳、次男は十六歳、三男は中二、私は五十三歳です。皆さん、自分の年齢、よくもう五十歳だからとか、もう六十歳だからとか言われる方がいると思いますが、私、五十三歳まで生きてこられたって、すごくうれしいと思います。なので自分が生きてきた年数にどうか皆さん、誇りを持っていただけるといいかなと思います。私、生まれは兵庫県の尼崎市ですが、三歳から六歳までは、なんと枚方市に住んでいました。ただ、この枚方市に住んでいたときに性暴力被害に遭ったんですね。ちなみに、場所は山田池からちょっと上がっていったところです。藤阪ハイツにも親戚がまだ住んでいますけども、当時はまだ竹やぶの中でした。最近見に行ったら、とてもきれいな住宅地になっていました。枚方に住んでおりましたので、こうして呼んでいただけるのもすごく里帰り気分ですごく思っています。そして、小学校一年生から三十四歳までは福岡県の糟屋郡というところで過ごしましたので、昔話をするとき、ちょいちょい博多弁が出ます。手話通訳の方が分かるような博多弁にしたいと思いますけれども、分からなかったら言ってください。現在は大阪府の吹田市に住んでいます。ふだんは、子育て講演会で子どもとの関わり方とかをお母さんたちに伝えさせてもらったり、

あとは、「おやこひろば」といって、地域のお母さんたちと、親子向けにリズム遊びをやったり、今はヨガとかピラティスとかを開催しています。ヨガは今、Zoomでも始めました。しかも無料です。一緒にヨガをやりたいという方は「おやこひろば」のホームページやブログから見てください。あとは性犯罪・DV講演会ということで、こういった感じの性暴力被害に関する講演活動をしています。

心理カウンセラーということで、ふだんは自宅の一階を事務所にして、カウンセリングとかをやっています。ただ、対象が性暴力被害、DV、虐待被害の方が多いです。ですのでそういった方はやっぱり出向いて来られるのがとても大変です。なので去年ぐらいからは、コロナになったものもありますけれども、Zoomでカウンセリングを行うようになりましたが、やはり交通、電車とかに乗るのが怖いとかいう方にとってはZoomのカウンセリング、非常に喜ばれておりまして利用が増えています。

もう十一年前になりますけれども二〇一〇年、関西テレビ、今は「報道ランナー」という名前になりましたが、昔、「スーパードキュース・アンカー」という番組タイトルだったときに、私、「加害者をつくらない子育て」という、十分間ぐらいの特集を組んでいただきました。性暴力がテーマですけども、あらゆる暴力をなくすためにどうしたらいいのかについてまとめていただきましたので、自己紹介を兼ねてこちらを見ていただきたいと思います。性暴力被害者あるあるですが、こうやって被害当事者として活動したり表に出たりしようと思うと周囲から、性暴力被害

に遭ったなんか言つて恥ずかしくないのかと言われることがありました。

でも考えてみてください。被害者は恥ずかしいのでしょうか。自分が望まない被害に遭つて、被害に遭つてそこから恥ずかしい思いをして生きていかなくちやいけないのでしょうか。そういったことを私はこの十一年間活動しながら、皆さんにお伝えすることをしています。後半、この話が出てきますので、また聞いてください。

それでは、この番組を見ていただきます。

(動画上映)

○柳谷和美　そういうことで、この写真は五歳の頃の私、昭和四十三年生まれですから、一九七三年、昭和四十八年頃の写真ですね。そもそもこれ、突っ込み所満載の写真です。五歳のお誕生日に買ってもらった自転車に乗っていますけど、見てください、表情、硬いでしょう。うれしいはずの自転車が、何か嫌々写真を撮らされて。あと、もう一つはこの短いミニスカートですよ。もうこんなの、はかせんといつて、本当にね、そういうところも突っ込み所です。

じゃあ、まず、なぜ今も、四十八年も前のことを覚えていいのかをお話したいと思います。実は突然思い出したのではなくて、五歳の頃の不快な感覚を思い出し続けていました。それこそ五歳のとき、枚方市に住んでいたときに被害に遭つたときは、家に母親と私と当時三歳の弟、一歳の弟、四人がいました。保育園から帰ってきた夕方だったと思います。ちなみに私、青桐保育園というところに行っていましたけど、保育園から帰ってきて退屈だったんでしょね。隣の家

に三姉妹が、三人とも小学生でしたけど、いたので、いつものように、その三姉妹と遊ぼうと思つて、お隣へ行つてくるといつて、ペろつと行くんですね。そうすると、その三姉妹の父親が出てきて、「お姉ちゃんとおばちゃんたち出かけてんねや」つて。で、諦めて帰ろうとしたときに、「おっちゃんと遊ばか」つて言われたんです。五歳です。性教育もプライベートゾーンが何たるかも教えてもらつていない私は、あつ、おっちゃん遊んでくれるんだ、ラッキー、ぐらいな感じで家上がり込むんですね。そこで、言葉巧みに遊びという名目で被害に遭います。「ここに寝てみ」とか、「脱いでみ」とか、いろいろと言われて。五歳の私は断るとか、大人に対してノーを言つていいとか、全く知らないし。自分の父親、ちよつと自分の機嫌が悪いと、どなったり、どついたりしてくる人だったので、自分より体が圧倒的に大きい大人に対して、そんなことはしたくないとか嫌だとか、言えないんですね。言われるがままに被害に遭いました。

そして、私は、目隠しをされてあおむけの状態で見ている間に行われた不快な体の感覚だけ覚えていたんです。なのでその被害に遭つた後、寝るときにあおむけの状態になると、その時の事を思い出して、あの行為は一体何だったんだろうつて。何か特に性器周りを触られたり、いろいろなことをされた。そして、あのおなかの上にびしゃつてお水がかかったのは、あれは一体何だったんだろう、あのお水はどこから来たんだろうつて、ずつと思ひ出し続けていました。思春期になる頃に、あれは精液だったと気づくんですね。そうになると、自分の体が忌まわしいんです。自分の体が、気持ち悪い、汚いと思つようになりました。



じゃあ、なぜ親に訴えられなかったか。その後、私が小学校一年生に上がる頃に福岡県へ親の仕事で引越すんです。そのときに家出をして保護された母方のいとこが、当時十六歳でした。「家に帰りたくない」というので母は、かわいいおいとこですから、「帰りたくないんやったらしばらく福岡におつたらいいやんね」ということで、うちに二週間ほど滞在していました。そのときにちょうど私、とびひという皮膚疾患で学校を休まねばならなかったんですね。両親は魚屋さんをしていたので、親にしてみれば、小学校一年生の娘を家に一人で留守番させるんだっただけ、いとこもおるから、ちょうどええわぐらいの感じですよ。そして私は、親が行ってきますと出ていった後、そのいとこが「和美、ちょっとおいで」って、そこから被害が始まったんですね。

その日にされたことを何で親に訴えなかったのか。実はうちは、父が望むいい子でないとい、父親からはどなられる、たたかれる、母からのフォロワーは全くない家でした。うちの母親は、「あんたはお父さんの子、私は産んだだけ、もうお父さんがかわいいてかわいいてしょうがないのよ」、そんなふうだから私は母親にも助けては言えないし、父親にも要らんことを言ったら怒られるんじゃないかと、小学校一年生ながら思っていました。うちの父親は自称子煩悩です。「子どものためだったら人殺しでも何でもやったるわ」みたいなことを言っていた人です。とはいえ、小学校一年生の子どもが、そんなこと、本当はせんよねとか、恐怖で思えないですよ。なので小学校一年生ながら、このいとこに私がされたことをこの父親に言ったら、父親はきつとぶち切れて、いとこを殺すかもしれないと思いました。そして、人を殺して、父親が刑務所に入れられ

たら魚屋さんができなくなつて収入がなくなつてお家から出ていかなくちやいけないうつて、そんな恐怖を小学校一年生でも抱えられるんですよ。だから、私は言わないという選択をしました。多分、いとは親に言わんね、という様子を見ていたと思います。言わない私に対して、二日目、三日目、どんな行為はエスカレートしていきました。でも、ずっと誰にも言えなかったです。

助けてほしいなど頼つたり甘えたりしたら、甘えるな、自分で何とかせうつて怒られると思つていました。母親もいつもそう言つていたからです。私は弟の面倒がいい立派なお姉ちゃん、「ちっちゃい頃からあんた、何でも自分で自分で言つて、自分で何でもできるもんね」、褒められている言葉が逆に裏目に出る場合があるんですね。だから、どんどんどんどん、子どもは追い詰められていきます。周りからは子煩悩のお父さん、優しいお母さん、そして私は親に怒られたくないので、特に父親に怒られたくないので礼儀正しいしっかりしたお姉ちゃんを一生懸命演じていました。なので、周りからは仲よし家族に見えます。となると、虐待やDV、性暴力は外から見えないので、誰からも助けの手は入ってきません。

じゃあ、なぜ不快な感覚、接触に対して嫌だと言えなかったのか。七歳の頃、小学校一年生のときの、当時十六歳のいところからの被害も要求自体は暴力的ではなかったんです。さっき言ったように、「和美、ちょっとこっちへおいで」とか、「服を脱いでごらん」とか、おらおらみたいなレイプじゃないんですよ。嫌だと断ることで、父親と同じように怒られる、キレられるかもしれないと思つて断ることができませんでした。さらに、嫌だと言つていいとか、泣いていいとか

を許されなれと思つていたからです。

そもそも子どもへの性暴力は、脅迫や暴力がないことが多く、かわいがりや遊びの延長にある場合、子ども自身が性暴力と認識しにくいのです。本当にあり得ない話ですが、小学校の教師が子どもにも性暴力をする場合、「君のことが一番かわいいんだよ」って、「君が一番優秀だから一番気になるんだよ」と言つて手をかけるんです。性暴力被害者の集まりなんかに行くと、そういうつた被害を体験された方が非常に多いです。先生に気に入られておられると思つたら、「ノー」が言えないですよ。教室のみんなが見えていない死角から下着に手を入れて腫に指を挿入されたりするんですよ。「ノー」と言えない子どもの弱さに付け込んだ非常にひきょうな手口ですよ。私もそういうことでした。かわいがりですよ。いとも「和美ちゃんって、かわいいね」って言つていました。ちなみにその後、私は思春期以降、「和美ちゃん、かわいいね」と言われたら、きつてなつていました。「かわいいとか言わんといてくれる」って。なぜなら、私はかわいいという言葉と不快な感覚がセットだったからです。「何でかわいいとか言うわけ、きしょつ」みたいな。

性器を使用しない性暴力があります。写真や動画を撮るとか、のぞく、下着を盗むとか、においを嗅ぐとか、これも気持ち悪いですね。あと、関係性を利用して近づいてきます。子どもへの性暴力は、加害者が見知らぬ人もありますよ。何か公園で声をかけられたとかね、猫ちゃんを見に来ないかとか。でも多くが身近な、親、保護者、兄弟、親戚、親の知人や教師、塾や習い事の

先生である場合もあります。子どもが断れないことを利用しています。ひきようだということですね。残念ながらこの身近な親、性暴力と認識していない親が実はいます。ある芸能人は、自分の娘が生まれたときにかわいくてしようがなくて、おむつ替えをしていて、この性器に男のんが入るんかと思ったら嫌だと思ったから、わしが初めてのやつになったろと思って指を入れたったという芸能人が本当にいますよ。気持ち悪いでしょう。そもそも不潔です。性器はとでもデリケートな場所なので、そんな汚い手で、特に子どもなんかは敏感ですから、そういったことで性感染症になる可能性もあります。だから、自覚しない性暴力が実は子どもへの性暴力で多いということですね。

### 自暴自棄だった思春期

私も自分の体がもう汚くて価値がないと、自暴自棄になっていきました。自分の体がもう汚くて価値がないと思うと、もうどうなったっていいと思っちゃうんですね。もう殺されようが殴られようが暴力を受けようが、どうせ私の命は、どうせ私の体は価値がない、汚いからどうなったっていいやって。そもそも犯罪を起こす人たちの心理状態は、分かりやすい例で言うと例えば池田小学校の宅間死刑囚、死刑執行されましたけど、ああいう人たちは基本的に犯罪を起こす前って、どうなったっていいやって、この自暴自棄が加害のスイッチになります。逆に言えば、自分を大切に思っていたら、人に加害をしようと思えないんですよ。子どもの非行、万引き、援助交際、恐喝などの背景には、家に居場所がない、自分を無力と感じてしまう、虐待やDV環境、

性暴力被害がある場合があります。なので、問題行動を起こしている子どもたちは、問題児だから排除するのではなく、助けてと言えない子どものSOS行動だというのに大人が気づいてあげてほしいなと思いますね。ちなみに私は中学一、二年ぐらいの頃から、酒を飲んで、たばこを吸って、暴走して、シンナーを吸って、そして売春までしていました。自分の体で金を稼いで何が悪い、どうせ私の体は汚いっちゃけん、今さら大事にしたところで何になるわけ、汚いもん、私の体って思っていました。子どもの頃の性暴力被害は、そうやって健全に健康的に生きる子ども時代まで奪うんですよ。その後の時間まで奪うということです。楽しい子ども時代はありませんでした。いつも心の内側で、表面上は明るく楽しく元気な和美ちゃんを演じているんですよ、友達と遊ぶときも、仲間外れは怖いから。でも、あははって遊びながら、友達たちと遊びながら、いいね、あんなたちは幸せそうで、どうせ私の体は汚いけん、へらへら笑って楽しそうやね、私、心から笑えんっちゃけどどうしたらいいと。もう、小学校低学年ぐらいの頃からそんなふうにならずって思っていました。

いい子でいることしか許されず、ネガティブな状態でいることは悪いとされているので、自分は大切なんだと思うことができなくなっていくんですね。自尊心が低いと自分を大切に思えないので自己犠牲、全部自分が悪いと思う生き方になるんです。父親が怒るのは私のせい、弟がけんかをするのも私のせい、両親がけんかをするのも私のせい、全部私のせいって思っていました。なぜなら、そうやって言われて育ったからです。

こんな苦しさを抱えているのに気づいてくれない、自分を支配する父、母、五歳のときの加害者をいつか殺してやりたいと思うようになったんです。だから、中学生ぐらいの頃から私、その当時もう福岡に行っていたので、どうやったらあの枚方の隣の家のおっさんを探すことができるだろう、どうやったら完全犯罪で一番ひどい殺し方で殺せるだろうって、もう夜な夜な思うんですよ。そんな中学、高校生でした。だから、明日楽しいことがあるかなって思えないんです。毎晩、人を殺害することはかりを想像しながら眠るんです。小一のとときの加害者である当時十六歳だったところは、私に加害をした二年後、バイクの自損事故で亡くなりました。だからこうやって言えるんです。今生きていたら彼は六十二歳です。私がこうやって講演会で話をするのを彼が知ったらどうでしょう。恨まれて憎まれて、下手をしたら私自身の命が脅かされるかもしれないですね。それぐらい性暴力被害って根が深いんですよ。今は、彼が死んでくれたことで、加害者は身近にいるんだよと言っていいよって、彼に免罪符を得たような気になっています。彼がこの辺にいるとしたら、ありがとうぐらい思っています。

デートDV被害に遭っていたのは二十歳の頃です。私、十八歳から二十一歳までの約三年間、お付き合いした彼氏からデートDVに遭っていました。最初はとても優しくかったです。二つ上の高校の先輩でした。付き合い出して半年目、二人で焼き鳥屋さんへ飲みに行ったときに、突然彼はスイッチが入って、いきなり首をがとつかまれて、「きさん、こら」、分かりますか、きさんって、おまえですね。「俺の前に何で付き合ってた男がおるとや」という訳の分からん理由

でキレていきなり殴られ始めたんです。焼き鳥屋のマスターも、「おお、ちょっと、お兄ちゃん、落ち着いて」みたいな。そうしたら彼が、「すみませんマスター、外で話してきます」と。私は外に連れていかれて道端で殴られて、アスファルトと彼の靴の裏で顔を挟まれるというね、すごい擦り傷ができましたけど、そういった暴力被害に遭い始めました。でも、うちの父親から、「おまえのことを思うから殴んねんぞ」と言いながら殴られていたので、彼に殴られていても、私のこと思っているから、殴るんだと思っていたんです。おかしいでしょう。だから、「親は体罰はしていいけど、よそは駄目」というのは通用しないです。親から体罰をやめていかねばならないです。この体罰はいいけど、この体罰はいかんって、限度は分からないでしょう。体罰試験がありますかという話です。なので、体罰は絶対にしてはいけない、というふうにしてほしいと思います。今年の四月ですかね、体罰について、法律で禁止されるようになりましたけど。一部の方は、「昔はしつげのためにたたくなんてようやつとつたんや」って、でも、そうして心を傷つけられた人たちがいっぱいいます。でも、心を傷つけられたと言いたくない、恥ずかしいからです。暴力を受ける自分が悪いと思うからです。そしてセックスも、相手から避妊を断られ、十九歳で二度、中絶をしています。

改めてちょっとDVについて、私も監修させていただいた枚方市の小冊子にもDVについて書いてありますが、殴る、蹴るだけじゃなくて心理的、性的、経済的、社会的暴力、子どもを利用した暴力がたくさんあります。今、私、大学生の学生さんとか高校生の生徒さんとかにもデート

DV防止の講演をさせていただいたりしていますが、感想で皆さん、六、七割の子どもたちがDVって殴る、蹴るだけだと思っていたって、いまだに思われているんですね。精神的DVがあるって知りませんでしたという感想を書かれる子がいるのでね。でも今、一番問題になっているのは、どっちかというと、精神的DVです。そのほうがやっぱり心を病みます。殴る、蹴るもそうですけど、精神的DVは、じわじわじわじわとその人の自尊感情を傷つけていくので、思春期に入る頃、中学生になる頃には子どもたちに知らせておきたいって思います。後半にお話ししますが、どうやったたら心地よい健全なコミュニケーションがとれるか、そこをちゃんと伝えてあげたいなって、暴力、怖いよ、怖いよだけじゃなくて。

DVは、緊張形成期があつて、爆発期があつて、ハネムーン期があります。私もそうだったんですよ。相手が爆発すると、どかんと殴られ蹴られして、私、一回目殴られたとき、もう別れようと言ったんです。そうしたら、もう泣くわ、謝るわ、「おまえがおらんと生きていけん」って、「別れんといてくれ」って。そんなことを言われたら、もうやっぱり揺らぐわけですよ。もう殴らなくなって言いよるけん、信じてみようかなって。でも結局、これ、ぐるぐるぐるぐる、回り続けた三年間でした。

じゃあ、なぜ脱出できたのかですけど、実は気づいてもらえたんです。DV被害に遭っていたことも親には言いませんでした。だって親に言ったら、うちの父親、多分、DVのその彼氏を殺しに行くと思っていたから。なので、ばれないように殴られたことも分からないようにしていま



した。ちょうど、彼と付き合っていたときは両親が魚屋さんから居酒屋に職業を変えたので、同じ一つ屋根に住んでいます。生活サイクルが逆転しているので、家にいても会うことがなかったんです。だから、顔が青あざだらけになっていても、青あざが引く頃に何かこうおもむるに「おはよう」とか、声をかけてみるとかしていました。私、高卒で就職していましたが、朝、会社へ行くときには両親は寝ているし、会社から帰ってきたときにはもうお店に行っていたので、会わないで済んだんですね。ただ、何で気づいてもらえたかといったら、近所の、ちっちゃい頃からお世話になっていたお姉さんが、たまたまうちに用事があった、そのときに私はパンダみたいな顔になっていましたから、「どうしたと、和美ちゃん」みたいな。そこで初めて、「いや実は・・・」ってなりました。ちなみに、働いていた会社のお友達なんかは、みんな私にあざができているのも知っていますからね。もうずっと言われていました、「もう別れりいよ」って。そのときに私は、「でもね、別れんといわなくて泣いて謝るけんね、また信じてみよっかな」、「あなた、もうそれ、何回言いよう」とって。「いや、でもねって、かわいそうやもん、私が見捨てたら」ということを繰り返していました。でも、そのお姉さんに気づいてもらえて、距離を取ってもらえたんですね。そのお姉さんが、「うちに遊びに来たりしたらいいやん」とかって、そのお姉さんは「別れり」とはあんまり言わなかったんですね。今振り返ると、そのお姉さんは人材コンサルタントみたいなお仕事をされていたので、そういうのが上手だったのかなと思いますけど。それで、冷静になれて別れる勇氣を持てましたが、ただし決死の覚悟でした。なぜなら、

「おまえと別れるぐらいだったら、おまえを殺して家族も殺して俺も死ぬ」と言っていたから。自分だけ殺されたらいいけど、家族も殺すと言われたら、怖くて、別れると言えなかつたです。だからDVで別れられない一番の原因は何かというのと、恐怖です。

育児はなんとかなると思ったけど・・・

無事脱出をして、同じ会社の同僚と結婚することになりました。一度目の結婚、育児は何とかなると思っていました。子どもを産んで、あやして、おっぱいをやって、おむつを替えてとかすれば育てられるのかなと思いました。ところが、よく泣く、ぐずる、甘えてくる、思いどおりにならない息子をどなつてたたくことしかできなかった。機嫌がいいときはいいけど、泣かれ始めるともういらいらする。最初はあやすんですよ、はいはいはいはいつて。でも、泣く、泣く、泣く、泣く、「いつまで泣くん」ってなるんですよ。そんな自分は母親失格だと自分を責めて思い悩むんですが、一回目の夫や親、友人にも相談できず、相談できる人も探せませんでした。なぜなら、私は明るくて元気で何でもできる和美ちゃんだから。「私、悩んでんねん。私、困つてんねん、子育てができない」って、言えなかつたです。私はいつも何でもできなければならなかつたから。だから、助けると言っているよって、誰からも教えてもらえなかつたから。何でも自分で乗り越えなくちゃって。一人で抱え込んで、苦しんで、いつか子どもを殺して私も死のうと思いました。一回目の結婚のとき、子どもが生後九か月のときに初めて夫の転勤があつたんですね。当時、福岡県から熊本県に引越して、周りに友達もいない、親戚もいない、あの当時はパソコ

ンもなければLINE通話もない。ちょっと長距離電話をしようと思ったら、三十分で軽く千円かかる。だから、誰かに電話をすることもできなかったし、子どもと二人っきり家に籠もっていました。

このままでは親子で壊れてしまうと思って、一歳半の子どもを保育園に預けることを決意しました。元夫の関係者がいないことを願いますが、彼もまだ若かったのもあるし、子育てとは何ぞやが分からなかったという大前提で聞いてください。彼が全面的に悪いとかではなくて、やっぱり知らないって怖いということですけども、私が「子育て、しんどいねん」と言ったときに、彼からは、「えっ何で、子どもと二人でさ、家におつてさ、昼寝もできてさ、遊べてさ、何が嫌と、何が大変と」って、「あんた母親やろ、できるやん、何でできんと」、「保育園に預けたいいいけどさ、家のことちゃんとできると、掃除も家事も子育ても」と言われました。家事を手伝うよとか、協力するよとかいう言葉は一切なかったです。そのときに、私、「一切ご迷惑をおかけしませんので働かせてください」と言って、いわゆるワンオペ育児です。三十年経った今でも続いていますよね。お母さんが一人で子育てから家事から全部を背負う、ワンオペ育児状態が始まりました。

保育園に預けられるようになって、ちょっと距離が置けるようになったので、虐待の頻度は減りました。でも、子どもが思いどおりにならないと手を上げたりどなったりして自己嫌悪、何で虐待がやめられないかというところ、子育てモデルが父親からの虐待、母親からの精神的ネグレクト

しか知らないからです。後でまた説明しますけど人間は学習していく生き物ですね。生き方だったりコミュニケーションだったり、関わり方を学習していくものです。周りの大人や社会の状況で学んで学習していくんですね。なので、社会が優しくなれば優しい子育ては可能ですけれども、このときの私はそういうことは知る由もなかったですね。

ちなみに厚生労働省が出している子ども虐待による死亡事例の検証結果ですけど、加害の動機、子どもが死んでしまった検証の結果で、しつけのつもり、いわゆる体罰で子どもが死んでいるんですよ。それでも体罰が必要ですか。さらに、泣きやまないことにいら立つが、実はこれが十五・六%、一番多いです。子どもが泣きやまないと大人はいら立つんです。私が、カウンセラーの勉強を始めたのが二〇〇六年、もう十五年前ですけど、その頃から何でこんなに泣きやまないことにいら立つんだろうということを独自にいろいろ、勉強したり研究したりセミナーに行ったりしている中でたどり着いたのが、戦争だったんです。実は今の母子健康手帳の前身は妊娠婦手帳というのですが、いつできたか御存じですか。昭和十七年、太平洋戦争真つただ中にできたんです。なぜ、戦争中に妊娠婦手帳なのか。当時、戦争も昭和十七年頃には、日本は、皆さん、歴史を御存じのとおり、もう負け戦だったです。どんどん資源も減ってくるし、食糧も減ってくるし、そして、戦地に行った人たちはほとんど死んでいくし、ということ、国が政策をとったのは、人海戦術、人を増やして人で勝とうって。だから産めよ、増やせよ、子どもを産め、産め、産め。女性は子どもを産むための機械とされて、男性は子どもを産ませるための機械になったん

です。人権とか命の貴さなんかなくなっちゃったんです。国のために戦うための兵器になれず。もう昭和が始まってからずっと戦争をやっていますから、その中で結局、産めよ、増やせよの政策はうたったものの、食糧難だったりして妊産婦が死亡したり、出生率が非常に下がっちゃったんですね。死産だったり流産だったり、体内で赤ちゃんが死亡したり。そこで、国は何を考えたかという、妊娠したと届出をしたら妊産婦手帳をあげる、それを持って配給所に行ったら余分に配給をもらえますという政策にしたんです。恐ろしいですね。今ね、衆院選挙の真つた中でですけど、皆さん、政治もちゃんと見ておかないとこういうことが起こるといふことですね。

栄養がとれるようになってきたので、この妊産婦手帳によって、出生率は実際に上がったんです。この後、敗戦国日本にはGHQとってアメリカ連合国軍が政治や経済や、いろいろなことに介入してきます。そして、漏れなくこの妊産婦手帳にも関わってきます。昭和二十五年の手帳に何と書いてあったかという、「育児の心得」、「しつけ」という項目には、「正しいしつけは子どもの将来のためにも、周りの者のためにも大切です」、「しつけはごく身近なことから始めます」と前置きがあり、一番最初に、「添い寝の癖は母子ともに安眠できませんからやめましょう、一人で寝る癖をつけると目が覚めても一人でよく遊んでいるようになります」と書かれています。これ、今やったらネグレクトじゃないですか。これをやれと。「大体決まった時間におっぱいをあげましょう」とか、「子どもが泣いたらよく原因を確かめましょう、泣いたからといって、すぐお乳を与えたり抱いたりおぶったりするのはよくないことです」とありますけど、

これ、児童心理上でいうと、自分が泣いたりして何か気持ちを訴えたとき、すぐに抱いたりおぶったり、構ってくれないと、子どもはこの世の中は自分が甘えたり頼ったりする場所ではないって、人への信頼感をどんどん失っていく事が分かっています。誰も助けてくれないと考えるようになって、つながれなくなりえます。でも、こんなことが書いてあったんですね。怖いです。ね。「例えば子どもが転んでも自分で起きるように」と、ここでも同じです、さっきみたいにね、人への信頼感がどんどん失われていきます。そして、「親を困らせるようなこと、例えば泣き虫、わがまま、引っ込み思案などは家族の扱い方が悪かったためによく起ります、子どもを叱ることは難しいことです、叱るよりも導くようにしたいものです」と、何かあたたかもそれっぽく書いてありますけど、赤ちゃんが泣くっていろいろなことを訴えているんですね。おなかですいたとか、寂しいよとか、暑いよ寒いよとか、だっこしてほしいよとか。でも、その訴えを泣き虫と、じゃあ訴えるなっていうことですね。もう一つ、わがままって、要は気持ちを訴えることですよ、お母さん、だっこして、寂しいよとか、助けてよとか、隣のおっちゃんに変なことをされたんやけどどうしようとか言ったら、わがままと言われるんです。自分の意見を言ったらわがまま。じゃあ泣かんとこ、わがままも言わんとこっていったら、今度は引っ込み思案と言われるんですよ。この人、意見を言わんねみたいなの、どないせいっちゅうねんと思いませんか。私、これを読んだときに、「人間であるな」という裏メッセージじゃないのって思いました。訴えても駄目、訴えんでも駄目と言われているんですよ。これがいいか、悪いかは別として、でもこれ、

実際にちゃんと文献に残っていますから、調べたい人は調べてください。昭和二十五年に発行された母子手帳にはこれを書いてあります。そして、これにはアメリカ連合国軍、GHQの指導が入っていて、ちゃんと論文にも残っていますので見てください。

ただし、現在の母子健康手帳は、脳科学だったり心理学だったり分かってきましたから、変わっています。ちなみに、私は五十三歳ですけど、私が生まれた昭和四十年代までその流れでいってるんですよ。だから、構ってはいけないとか泣かしてはいけないとかでした。そこから八十年代に入って、心理学とか脳科学とかいろいろ、MRIとか、いろいろなことが進歩してきました。

二〇〇五年の、うちの次男の母子健康手帳ですが、「泣いたりぐずったりしているときはだっこして十分なだめてあげましょう」って。この時期では「抱き癖がつくなどの心配は要りません」って。「お父さん、お母さんがしつかり抱いてなだめてあげると、安心して泣きやみます」と書いてあります。さらに、「夜泣きする子が増えます」って、「夜中でも母乳やミルクをあげてもいいです、話しかけたり抱いたり、時には遊んであげることも必要です」と書いてあります。さっきと全然違いますね。あと人見知り、引っ込み思案と言われていましたけど、「人見知りは子どもによって、時期はまちまちだけど家族と見慣れない人の区別ができるようになった証拠だよ」ってというような事が書かれています。だから、人見知りをするのは賢くなっている証拠だよって、すばらしい成長だよってことです。でも、こうやって変わっていった、この母子健康

手帳、あの昭和二十五年に生まれた人たちって今、幾つですか、七十歳、七十一歳ぐらいですね。子どもが泣いてだっこをしている若いお母さんを見て、「抱き癖がつくからだっこせんほうがええよ」とか、「甘えっ子になるから」、特に「男の子だからいつまでも泣かへんの」って、男の人の生きづらさはここからスタートしていますね。なので、赤ちゃんが泣くのは気持ちを訴える、とても大切なことだと知ってほしいです。

そして、面前DVに遭った子ども、両親のDVを見たり聞いたりすることで脳が変形、萎縮するという研究結果が出ています。福井大学の友田明美先生とハーバード大学の共同研究で分かっています。でも、そりゃそうですよね、皆さん、今ちよっと力を抜いて、はあつてしたら力が抜ける。でも、例えば私がここでむちゃくちゃどなり怒ったりしていたら怖くないですかね。「オラア」とか言ったら、きゅうってなるじゃないですか。体がきゅうってなるということ、脳だっつきゅうってなっているんです。そして、その萎縮が、自分を守るために萎縮しているんじゃないかとも、友田先生はおっしゃっています。ただし、適切なケアで回復は可能ですとおっしゃっています。

本当に明らかな殴られた痕とか、特に子どもなんか、挙動が不審とか、夜追い出されているとかいう緊急時は保護や避難なども必要ですが、保護者を責めて排除や隔離をするだけでは解決できません。実際、二年前ですかね、目黒女児虐待死事件とかありましたよね。児童相談所で保護して、その後、保護者の元へ帰したところで結愛ちゃんは亡くなってしまいましたね。なので、



どうしたらいいかというと、子どもの心のケアもですけど、親、保護者にも寄り添い、心理教育、適切で具体的なコミュニケーションを伝え、トレーニングをしながら、子どもと親の全体性回復を支援することが望ましいということです。私自身も、長男を虐待していたときに虐待したら駄目ということは、自分が一番、分かっているんですよ。でも、どうしていいのかが分からないだけです。

この、どうしたらいいのですが、森田ゆり先生が開発された、虐待をしてしまった親のためのMY TREEペアレンツ・プログラムという虐待に至った親の回復プログラムを、行政とかでやっているところもあります。十三回にわたって、親の回復プログラムをやっています。今年に入って、子どもに対して暴言や暴力でしか関われない父親の回復プログラムがスタートしています。

### DVは、どこか別世界の話ではない

DVはどこか別世界の話ではないですね。性暴力を含む全てのDVは家庭、地域、社会の中で学習していきます。加害者は力関係をくり上げて被害者を支配します。さらに、DV問題は健康問題であり、経済問題です。私、十九歳で二回中絶したと言いましたが、あのとき、私も一応女として生まれたので、いつかは子どもを産みたいとは思っていました。なので、処置が下手くそなお医者さんだったら二度と子どもが産めなくなるかもしれないというのもうわさなんか知っていたので、当時はインターネットとかはないけれども、福岡に住んでいて、中洲の中絶

がうまいとされている産婦人科に行つて処置をしてもらいました。健康問題つてそういうことでしょう。だから、DVは性暴力が含まれています。デートDV、彼氏が避妊に協力しないのは、もう性暴力ですよ。たとえ付き合つていようが夫婦であろうが、性暴力です。そうして、中絶をしなければならぬ健康問題ですよ。下手をしたら私は、中絶をしたことで子どもが産めない体になつていたかもしれない。ただ、何か私、すごく妊娠しやすかつたみたいで、この中絶以降も流産したりしながら、結局、妊娠自体は九回しています。世の中に出したのが三人ですけど、六人のうち二人は中絶、あと二人は稽留流産、あと二人は自然流産といつてね、歩いてきたときにはあんと大出血をして流産とかいうこともありました。あと、DVは経済問題です。

学習していくつてどういふことかといふと、子どもたちが大好きな、何とかレンジャーとか何とかライダーとか何とかマンとか、作り物と同じことをする。これつて、子どもたちがちっちゃい頃から、自分が正義と思つたらパンチやキックはオーケーつて洗脳されていつてるんですよ、幼稚園や保育園に、先生たちの研修なんかに行つて、「クラスに二十人ぐらいいませんか、何とかライダーがみたいな」と、この話をする、もう先生たち、うんうんつてうなずかれます。

でも、これの究極が戦争でしょう。宗教だつたり国のことだつたりで、自分が正義と思つて他者を排除したり暴力を振るつたりする。だけど残念ながら、子どもたちに、こういつた番組を見るなどというのは無理です。うちの息子たち三人も好きです、ちなみに私も、松坂桃李くんがデビューしたとき、戦隊シリーズの番組をめっちゃ見ていました。最終回でめっちゃ泣きました、

でも、子どもたちに言っていたのは、「これは作り物であって、これと同じことをしたらあかんねんで」と、特に、再婚してカウンセリングを学んでから生まれた下の二人の子どもたちには伝えてきました。「あの〇〇レッドの背中にはチャックがついていてね、人が着てんねん、パンチ言うて殴られているみたいに見えるけど、角度を変えて見たら当たってないねんで」とか、「これを本当にやっていると思うて幼稚園でやったら、ただの暴力加害者だからね」と。それを幼稚園からずっと、大きくなるまで同じことをやっとなら、傷害罪で捕まるよということですよ。だから、「見たらあかん」じゃなくて、「こんなことをしたら暴力だよ、作り物だよ」と伝えていかないと暴力は終わんないなって、私は感じています。でも、これは私の感覚なので、皆さんに思いを強要はしません。

思春期女子がセックスをするリスクをちょっと見ていきましょう。私自身もそうだったですけど、十五歳未満の人工妊娠中絶、二〇一七年が二一八件。十五歳未満って小・中学生ですよ。二一八件、中絶をしているということは、ペニスを挿入されて膣内で射精されているということでしょう。妊娠中絶全体、年間一六万件。二〇一六年は十六万八千件。言い方を変えると、十六万八千人の赤ちゃんが毎年中絶されています。これ、明らかな同意、ちゃんと避妊とかもコンドームだけに頼らずに女性も積極的に避妊を考えていこうと今、私は、大人も性教育をちゃんとやろうと性教育講座でも伝えていきます。ただ文科省は、中学生は性交をしないという前提に立っているので、性交を教える必要はない、寝た子を起こすな理論。しかし、日本の刑法の規定では性的

同意年齢は男女ともに十三歳以上に設定されている矛盾。性的同意年齢が十三歳以上に設定されたのは百十何年前、明治時代の話ですが、いまだに変わっていないです。二〇一八年に法改正がありました。ここは変わらなかったです。なぜなら、恋愛の延長線上にセックスをするのは自由意思だから。おいおい、ちよつとちよつとちよつと、たばこもお酒も二十歳からなら、セックスももう二十歳からでよくないですか。だって、十三歳同士の子どもが性的同意をしました。セックスしよう、いいよって。妊娠しました、子どもが生まれました、どうやって育てますか、家を借りられますか、仕事ができますか、収入は、赤ちゃん、どうやって育てますか、学業は、義務教育は。だから、ここ、おかしいんですよ。刑法、性犯罪の検討会が法務省だったかな、ホームページにも出ています、どういふ議論がなされたか。もうね、吐きそうですよ。成人女性が十四、五歳の男の子と付き合ったとして、セックスをして、その成人女性が罰せられるのはいかなるものかと思えますという意見が出るんですよ。はあ、我慢ということを知らんですか。大切だからこそ、やらないという選択肢があるでしょう。

性知識に無知な末に妊娠、小学生の場合、気づいたときには臨月になっていた、これは実際に起こっています。小学校五年生の女の子、母親が再婚した義父から性暴力を受けて、気づいたときには中絶ができるぎりぎり、六か月直前でした。産婦人科医のお医者さんたちは、妊娠三か月以上六か月未満までの中絶は非常に嫌がられます。なぜなら、三か月を過ぎたら中絶の手術の内容は自然分娩をさせるような状態、陣痛促進剤を打って、自然に分娩させて、そして未熟なま

まの赤ちゃんを産ませて中絶をするという手段です。中には産声を上げる赤ちゃんもいるんです。それをどうするかといったら、口を塞ぐんですって。やりたくないですよ、そんな手術。

でも、遡ったら妊娠って一人でできるんですか。種元はどこへ行ったの。そんな話ばかりでしょう。去年かおとしも、二十歳の女の子ですかね、トイレで産み落として赤ちゃんが亡くなっちゃったって。いやいや、逃げた男も同罪やもんで。何で女の子だけ捕まらないといかんと。すみません、むきになるといつい博多弁が出ちゃいますね。

性感染症も可能性がありますね。恋愛にはまるのは、ませた子よりも寂しい子です。私も売春をしていたとき、自分の体の上であえいでいる男たちを見ながら、ばかじゃない、こいつ、私があんあん言っているのを気持ちいいと思ってるわけ、演技やけどねって。売春をしながら私は男に復讐をしている気持ちになっていました。こいつらばかやねって。だから、私にとってセックスは忌まわしいことではなかったですね。でも本来、セックスは一番究極の、お互いを尊重し合えるコミュニケーションの究極であってほしいです。それを語り出すと長いので、今日ははしります。

### 自分が望む人生を歩むための知識としての性教育

要は妊娠の可能性がある行為、体のことを科学として知るのは権利ですよ。大体、中絶をさせられている子どもたちは、こういうことを教えてもらっていないから。分からないですよ、膣にペニスを入れたら妊娠するなんか教えてもらっていないですもん。で、気がついた時には妊

娠しているんです。だから、教えないっていうのも性暴力じゃないのって私、思いますけどね。

子ども虐待による死亡事例、十八歳未満の子どもの中で一番殺されている年齢は0歳です。さらに、ゼロ歳ゼロか月が一番多く殺されています。どういふことかといったら、生まれてすぐ殺される赤ちゃんが一番多いといふことでしよう。若年の妊娠といふ事もあるのでしよう。嫌だを言えず、嫌だを尊重されず、望まない妊娠をしてしまう女性が多いといふことでしよう。寂しさや不安から体のつながりを求めてしまうこともあるでしようけれど。

もし、五歳の私が、プライベートゾーンを人に見せたり見せられたり、触ったり触られたりすることは性暴力と知っていたら、相手が大人でも、知っている人でも嫌だと言っていいたら、知っていたら、そんなことがあったら絶対に怒らないから話してねといふことを知っていたら、被害は最小限に防げたでしよう。心のケアを受けて、その後の生きづらさも軽減されていたのではないでしようか。あれは駄目、これは駄目、これが危ない、あそこに行くとかじゃなくて、たった一人でもいい、この人にだったら話せる、物理的、心理的な居場所づくりが必要なんです。当事者も含めて、じゃあこうしてみようかとか、こうしてみたらって、どうしたらいいかなって、リスクアセスメントじゃなくて、ニーズアセスメント、それは、子どもたちが持っている力、レジリエンスを信じるということなんです。これね、森田ゆり先生の「トラウマと共に生きる」という本の中にこのことが詳しく書いてありますが、私はその本に約五十一ページ、私の体験を書かせていただきました。もし、よろしかったら読んでみてください。二ページほど、夫もコメントを

書いてくれております。

『トラウマと共にいきる』、その中にエンパワーメント、子どもの力を信じるってどういうこと書かれています。子どもって無力なように感じるかもしれませんが、私自身も五歳や七歳のときに性暴力被害に遭い、親から精神的身体的に虐待を受け、DV被害に遭い、自分も虐待をしてきてしまいました。だけど自分なりに、あっちこっちにぶつかりながら、ここかな、あそこかなって、もがきながら今までやってきました。ずっと私は、さっきのVTRでも出ましたけど、もう何度も、今でも、いろいろと思いついては、フラッシュバックしては、夫の前で死にたい、死にたいって暴れるんです。どういう暴れ方をするかというと、自分の体をたたきまくるんです。もう、こんな私は死んだほうがいいって。真っ黒になるぐらい自分の体を殴りつけるんです。何だったら壁に頭を打ちつけて、頭から血を流したりします。自分を大事に思えるのは、もう本当に難しかったです。

何で最近、性教育が後退したかというところ、七生養護学校事件が関係しています。説明すると話が長くなるので、興味がある方は七生養護学校事件で調べていただいたら出てきます。ざっくり言うと、養護学校の生徒同士がセックスをしていたという事案が発生しました。やっぱり性教育をちゃんとしなくちゃいけないということになりましたが、養護学校ですから、少し知的な遅れがある子どもたちだったので、テキストの勉強ではなかなか理解しにくいということで、先生たちと保護者の皆さんと一生懸命に話し合って、人形を使った性教育をしたんですね。それが非常

に分かりやすいということ、一時期、全国各地から見学が来たりしていたのに、東京の某工都知事のとときにこんな嫌らしいことを子どもたちに教えていると国会で取り上げられて、このときの先生たちが処分されたんです、後に逆転勝訴するんですが。

でも、ちょっと待って。いやらしいことを教えてって、皆さん、私たち、いやらしい命ですか。さつき言ったようにセックスって、私たち大人が、究極の、本来であればお互いを尊重し合えるコミュニケーションにしていかねばならないんです。いやらしい結果で生まれた命なら、いやらしい結果だから別にどうなったってよかるうもんってなりますよね。どうなったってよかるうもんとしたら、他者に暴力を振るえますよね。なので、性教育をしないと、殺人、虐待死の加担をすることになるかもしれない。健康に生きることを奪うかもしれない。だから、命の尊厳、体の仕組みを知るため、より健康的に生きるため、安心、安全、自信を持って生きるために、年齢に合わせた性教育は人権教育だという視点を持ってほしいです。一人一人が安心に安全に生きる権利です。性教育って何もセックスのことだけ教えるのじゃなくて、性を通して自分の体ってとつてもすばらしいんだよということ、健康のことを伝えていきたいということです。

ちなみに、私が開催している性教育インストラクター養成講座は年齢、時期別にやっています。最後に更年期、老年期編という回になっていますが、このときにみんな最後にスクワットをやるんです。性教育で、何でスクワットかというと、骨盤底筋という、特に女性の場合は子宮や卵巣を支えている大事なハンモックのような筋肉があります。これが固まることで動きが悪くなっ



て、かさかさになって、臓器脱という疾患になるんですね。筋繊維ってこう、柔軟に伸びたり縮んだりするのが一番健康的ですね。でも、使われていないとどんどん、要はさびて固まってくるので、広がりもしないし縮みもしないで、その状態で膣から膀胱が出てきてしまったりとか、座ったときに何かピンポン玉が挟まっているみたいな感じは、臓器脱の可能性があります。遡ると、実は思春期の頃から、ヨガだったりピラティスだったり、この骨盤底筋を滑らかに動かしてあげる適度な運動が必要なんです。更年期、老年期編を学習すると、やっぱり遡って幼児期から自分の体の性に関する知識って知っておいたほうがより健康に生きられるという事が分かるんです。やっぱりお下の世話をされる最後って、なるだけ避けたいと思いませんかということなんです。だから、生きる力を伸ばすため、性教育は人権教育ですよということです。

一人で生きるか誰かと生きるか、子どもを持ちたいか持ちたくないか、どんな生き方、仕事かしたいか、自分の身に何かあったときにどうしたいか、ライフプランを立てたり、途中で方向転換したりしたときにも知っておいたほうがいい知識、性教育ってこういったことにも全部つながってくるんですね。子どもを持ちたい持ちたくない、持ちたいんだったら、やっぱり子どもの頃から食べ物とか健康面とか生活習慣を気にしなければならぬよ、ということらにつなげてきますね。

真の性的同意のためには、情緒的にも知的にも対等で両者が自発的であることや、お互いの理解とか、あとは、罰を与えられたり被害を加えられたりする心配なしに、同意しなかったり断る

事が出来る必要があります。昨日はよかつたけど今日は嫌よとちゃんと言える対等な関係ですね。両者がともにその行為をして起こる可能性のある結果を本当に理解し、社会的資源を活用できるかとか、性に関する正しい情報、知識を真剣に話し合えているかです。「ノーを伝える権利・ノーを受け入れる」、「ノーはあなた全部を否定しているのではない」ということですね。

社会的資源といったら、いろんな支援制度とか、機関なんかがありますが、こういった支援が受けられることを知らないで、鬱病で寝たきりだったお母さんに殺してくれと頼まれた息子の判決が出たみたいなニュースが出ていました。彼は生活保護の制度を知らなかったみたいですね。裁判でそういう話が出るんですよ。お母さんが寝たきりで、自分も職を失って食えることができない。そういうときってやっぱり生活保護を使っていいじゃないですか。

あと、思春期の子どもたちにはこういった「セイシル」という無料の性教育のサイトがあります。さっきの性教育に実はつながっていますが、特に男の子、床オナといって床にこう突っ伏して、自分のお尻と床の間にちょうどペニスが挟まりますね、それをぐりぐりやってやったら、当然気持ちよくなるんです。そういうのを癖にしていると、要するに強い力でしか気持ちよくなるなくなっちゃうんですね。あと強いグリップでマスターベーションをしていると、実際に、セックスをして子どもをつくりたいとなったときに、膣はそんなにぎゅっとなつていて場所ではありません。膣はふわっとしています。そこで床オナや強いグリップの癖をつけているペニスを挿入した途端にしぼんじやいます。しぼんじやうと射精ができません。これが不妊の原因になってい

ます。膣内射精障害といって、ちゃんと名前がついています。不妊治療で泌尿器科にやってきた男性のうち、半分ぐらいだったかな、数字はうる覚えですけど、泌尿器科の先生が言っていました。だから、子どもの頃からマスターベーションはしていいんだよ、だけど、床オナとか強いグリップはしていけないよ、一人でやるもんだよ、人に見せたり人を利用したりはいけないよと、ルールとマナーをちゃんと教えてあげていけばいいんです。

そんなことを言ったらマスターベーションばかりするんじゃないかって保護者の方は心配されるかもしれませんが、何回やっても大丈夫です、もうね、七、八回したら疲れますと泌尿器科の先生も言っていました。その泌尿器科の、もちろん男性の先生ですけど、自分でも何回出来るかお試してみたそうです。受験勉強でいらいら、もやもやするってなった時、マスターベーションをして、しっかり集中したほうがよかろうもんなみたいな事を言っていました。そうやって、マスターベーションも健康に生きるためのやり方をきちつと伝えてあげたらいいんです。

思春期向けの性教育に関する情報を提供している「セイシル」というサイトは、もともと泌尿器科で膣内射精障害の人たちの治療用の医療器具としてのマスターベーショングッズをつくっている会社で作成しました。その教育事業部の方と今つながっていて、こういったサイトがありますよと教えてもらいました。とても分かりやすく書いています。子どもたちじゃなくて大人も見てください勉強になりますので、よかったら、「セイシル」って片仮名で検索すると出てきますので見てください。

## 被害後あるある

被害後あるあるとは、被害後の困難ですね。私自身、被害も何もなかったかのように振る舞います。知られたくないです。何で知られたくないか。私が、警察とか犯罪被害者支援の講演会のように必ずやるワークがあるんですね。被害者支援をやる方にはぜひ知っておいていただきたいということをやっているワークですが、二人一組になっていただいて、最初は自己紹介をしてもいいです。自分の好きなこと、趣味とか、山登りが好きですとか、映画が好きですって、そこそこ盛り上がりつつ仲よくなります。次に、じゃあ、仲よくなった隣の人に最近セックスした話をしてください、相手は誰で、場所はどこで、どういう手順でどういうふうにやりましたか、射精はしましたか、膣に挿入しましたか、何を挿入しましたか、肛門に入れましたか、あとはって言うと、わざわざわかってなりません。それで、すぐに、話さないでいいですよと言うと、何かちょっとほうつみたいな雰囲気になります。でも、性暴力被害者が被害を訴えようと思ったら、今皆さんが話したくないなという、最近セックスした話以上に、性暴力被害者は自分が望んでいない性に伴う話を、初めて会ったばかりの警察や弁護士に言えますかという、この事を知ってほしいから、このワークをしましたと説明します。でも、警察では言われますよ、実際に、訴えた人が言っていました。「どこをどう触られたんですか」って警察で言われましたと。私、性教育とか、こういう仕事をしているので、めちゃくちゃ一生懸命に練習しましたけど、膣とかペニスとか挿入とか言うのは、初めてのときはすごく恥ずかしかったですよ、でも、一般の人が言えますか、「私

のクリトリスをなめられました」って言えますか。「財布を盗まれた」とか「殴られた」とかは言えますよ。部活とかで男性も被害に遭いますけど、ペニスが勃起して射精をさせられましたなんて、性に関する被害は他人に知られたくないですよ。

被害を受けた後の無力感や自暴自棄は、もうさつき話したとおりですね。心のケアが必要なことすら分かりませんでした。だから、ずっと今の夫と出会う三十五歳ぐらいまでそうでした。ちなみにカウンセリングの勉強は二〇〇六年だから、三十八歳から始めたんです。そこからですよ。やっと自分の心の傷と向き合えたのはね。性虐待の場合、思春期に被害を認識しても支援が必要と分らずに自分の体に嫌悪感を持ちつつ平気そうに振る舞って心の傷が深まったりします。私自身、三十数年後に心のケア、カウンセリングやセラピーが必要なことに気づきましたが、探すのは自力、費用は自腹、踏んだり蹴ったりってまさにこのことです。

そして、声を上げたら二次被害です。「あなた、妊娠しなかったからましじゃない」とか、「一回だけだったからよかったじゃない」とか、被害者の方から言われました。これ、何の間違いですか。何でこういうことが起こるかというと、心のケアをされていないからです。傷ついたまんまで被害者同士が会ったり、会わないにしてもニュースで目にしたりするからです。私も実際、メールとか来ました。「あなたの被害はまだまし、偉そうに言うな」とか、別に私、偉そうに言っているわけじゃないですけど。被害者同士の傷つけ合いですね。

支援者があなたは悪くないばかりでは、自責を認めてもらえないため、受け入れてもらえない

感覚になります。これ、どういう意味かというと、被害者は「やっぱり私が隣の家に行ったから悪いんですよ」って、でも支援者はこう言います。「あなたは悪くない」と。被害者が、「いやいや、言うことを聞いて服を脱いだから」と言っても、また、支援者は「いやいや、あなたは悪くない」と。そうなると、被害者は「はあ？」と自分は受け入れてもらえないみたいな感じになります。「自分が行ったことが悪いって思っちゃうんだね」と被害者の自責を認めてからの、「あなたは悪くないです」というこの順番が分かっている支援者がいっぱいいます。それで傷つく被害者もいます。

あとは、社会が望む被害者像を求められます。笑ってはいけないと思うし、幸せになってはいけないと思う。オープンングから、私のイメージ、被害者らしくないですか。被害者はいつまでも泣いてうつむいて、こそそと生きていかねばならないですか。被害に遭ったからこそ幸せになりたいんですよ、笑いたいですよ。昔の私は無理をして笑っていました。でも、今の私は無理をしていません。何でかといったら、ちゃんと悲しんでいいって、泣いていいって、嫌だといいって、自分を認められるように、えっちらおっちら、自腹で払って学んで、セラピーを受けてカウンセリングを学んできたから。

例えば、もし加害者が検挙され実刑を受ければ刑務所という住む場所、仕事、食事がある。出所しても保護司がつくなど手厚いのに、被害者には何も無いという不公平感。私、これ、加害者の治療教育をやっている大阪大学大学院の、今は辞められた藤岡淳子先生に言いました。「何か

加害者になったほうが得じゃないですか」って、「私たち被害者はほったらかしですよね」って。「本ただね」と言われました。被害者は被害後、鬱、パニック、フラッシュバック、自傷などに苦しみ、日常も仕事も社会生活も困難になる。暴行、脅迫のない性暴力の場合、私の子どものときとかね、逃げたり拒否しなかったり、フリーズをした自分も共犯者という思考になり自分を責める。自死念慮に苦しむ、実際に自死することもある。私もずっと、自分はどうかやって死のうかなと思っていました。

被害者支援の課題ということで、被害を訴えてきた方には、起訴するしないを問わず、必ず専門の心と体のケアにつながるシステムの構築が必要だと思います。必ずこの専門家につなぐことで、刑法、性犯罪規定の改正でも議論された、冤罪が増えるんじゃないかみたいな。もうね、冤罪が増えるために本当に被害者になった人が救われなくてどうということやねんって感じですけど。でも、こういうシステムがあれば冤罪も防げるんじゃないかなと思うんですね。被害者が置き去りになることで社会にとって大きな損失になります。なぜかという、生きることが困難になるので、当然社会活動ができなくなります。人とのつながりへの不信感から命をつなぐことも、セックスが嫌になったりして、セックスをしなかったら子どもは生まれなとかね。なので、被害後にかかる費用とともに、予防教育としての性教育の予算を取っていただきたいと思っていますね。

あとは、自身の恐れや不安を認められる支援者の育成が必要です。失敗は宝物です。死にたい

という気持ちへの対応と境界線。私もそうでしたけれど、被害者は大体、「死にたい、死にたい」と言います。その時、トレーニングを受けていない支援者は「あなたが死んだら、私は悲しい」とか言いがちです。でも、そんな、他人の悲しみまで、どうして被害者は背負わされないといけないのかということ。死にたいぐらい苦しいんです。「死にたいくらい、つらいんだね」ということです。支援者こそセルフケアが必要です、カウンセリングやセラピーを取り入れてください。支援者同士の場を持つてほしい。あと、支援者自身が自己犠牲のモデルにならないでほしい、自分を大切にするモデルになってほしいなと思います。

さっきから刑法、性犯罪、何回も言っていますけども、私の友達の山本潤さんが代表をしている一般社団法人Springという当事者団体が、私たちのことを私たち抜きで決めないでほしいということ、性暴力被害当事者が生きやすい社会のため、刑法、性犯罪の検討会に、彼女が唯一、当事者として検討会に入りました。でも今回、十三歳という壁がなかなか高かったみたいです。ちなみに彼女は十三歳から二十歳まで、実の父親から性暴力被害に遭ってきた人です。

食欲、睡眠欲、性欲って、人間の三大欲求とまことしやかに言われますけど、これ、特に男性の性欲は我慢できないという言い訳をすることで、子どもたち、大人までも免罪符を得た気になっていませんか。それは恥ずかしいことだと、まず大人が認識してほしいなと思います。性欲はコントロールできると、日本で初めて大阪に性暴力被害者ワンストップセンターをつくられた阪南中央病院の加藤治子先生が講演会でおっしゃっていました。性欲はコントロールできます、



できないって甘えるということですね。

被害者には、行動や言動を変えられない壁というのがあります。幸せになつてはいけないという壁です。私もそうですけど、幸せになると親の手柄と思われるかと思つて、かつては自分でわざわざ不幸なところに行つていたんだと気づきました。不幸でいることで親にいつまでも心配してほしいという人もいます。あとは、親に子どもの幸せへの嫉妬がある場合です。ちなみにうちの母親はそうです。私が幸せそうにしていると、「いいね、あんたは旦那が優しいから」。いやいや、娘の幸せを喜んでほしいです。親からの支配が強かった人は選択する事に恐怖があります。でも、そういう人には、やるかやらないかを選ぶ権利があることを伝えてください。

#### 回復の過程

私の回復の過程はセラピーとかを受けてトラウマを癒やしていききましたが、やっと麻痺していた心の傷に気づいて、気持ちがあふれて激しい自傷行為をしました。フラッシュバックが始まる時、もう暴れて自分の体を打ちのめしたりしていました。セラピーに行つたり、森田ゆり先生の研修を受けたり、本を読んだりして、いろいろ、自分に知識を入れていったり、学んでいったりしました。たくさんのお会いや学びからの気づきを得てきました。

子どもも親も加害者にならないために、どうしたらいいのかというところを最後にお伝えしたいと思います。コミュニケーションの癖は言語や方言と一緒にだかつて思います。心地よいコミュニ

ケーシヨンの方法、優しく丁寧な伝え方をトレーニングすれば変えられる。さつき言ったように人間は環境に慣れて学習していく生き物なので、皆さんも福岡県で生活すれば博多弁がしゃべれるようになります。さつきみたいな話ですね。「おらおら、何やっとなじや」みたいなところで生活すると、「おらおら、何やっとなじや」ってなります。何かものがこぼれたときに、「オーマイガツ」て言わないでしょう。ぱっとしたときに出てくるコミュニケーションとか反応とかは環境がつくるものです。みんな、優しく丁寧な伝え方はちよつと考えたらできます。

自分はいいけど相手が嫌な場合もあります。例えばこの子を軽く押しただけと言っても、この子が「痛い」、「怖い」と言ったら嫌な気持ちなんです。よく学校現場なんかで、「○○君はもうごめんとやっているから許してあげなさいよ」とかいう、何で加害者の肩を持つかなみたいな場面があります。自分がよかれと思っても、冗談のつもりでも、「嫌だ」が優先、「嫌だ」を尊重です。この先に、性的同意が来るでしょう。子どものSOSに気づける大人になりましょう。「嫌だ」を二回言わせない。「やめて、嫌だ」でやめる。「嫌だ」を認めてもらう体験が子どもには必要なんです。

森田ゆり先生からの許可を得て使わせていただいています。さつき皆さんにお伝えしましたけども、泣くという表出がいけないものならば人間に備わっているはずがないですよ。人間にとつて必要だから泣くという表現があるんです。ゼロ歳児の赤ちゃんが、「お母さん、ちよつとだっこしてほしいんですけど」って言えたら泣かないでいいじゃないですか。「ちよつとくん

ちが気持ち悪いんですけど」みたいなね。

学習していったって、訴えることを覚えるけど、学習していったって訴えないことも学習しちゃうんですよ。学校現場とかは非常に難しいと思いますけれども、何か学校って、ノーを言わせない、ノーを言わない子がいいみたいな感じがします。言うことを聞く子がいいみたいな。私、すごくもやもやしているところですが。要は、傷つき体験をすると、こういった感情が生まれます。さっきの最初のVTRでやだやだのワークってやりましたね。やだって言うたらあかん、要は泣いてはいけない、感じてはいけないという、人間って怒りが出てくるんです、「怖いよ、怖いよ」、「怖いよって言うな」、「怖いって言うてるやろが」みたいに。何で泣いていたかよく分からなくなる。なので、こういった感情を封じ込めると怒りに変わる。この究極が戦争ですよ。戦争へ行きたくないと言ったらいけないでしょう。特に男性は、怖いとか寂しいとか、離れるの寂しいって言ったたら、男が何を泣いてるんだって言われますね。戦争へ行って人を殺してこいて、銃剣で刺してこいて言われても、怖いって言えなかったでしょう。だけど、このネガティブな感情がなかったら、怖いという感情が人になかったら、それこそ人も殺せるし、高いところからも飛び降りられます。今日は私、京阪電車に乗ってきましたけど、特急電車が走っている線路の真ん中に立つとけますよ、怖くないから、そのうちひかれますよ。怖いという感情があるのは心や体、命を守る力になるんです。不安があるから備えるんです、地震が来たらどうしようとか、台風が来たらどうしようとか感じるから備えることができます。見捨てられる不安があるか

ら相手を大切にできるし、悲しみを知っているから人に優しくできる、寂しさを知っているから人とつながろうとします。悔しいと思うから負けたくない、「頑張ろうと思うし、絶望を知っているから希望を見つけないと思うんです。私はずっと希望を見つけたかったです。自信がないと思うから成長しよう、学ぼうと思うし、失うことを知っているから、今日の前のいる人が明日いなくなるかもしれないと思ったら、今を大切にしようと思えるんです。ぐずぐず言っている子どもも、目の前にいるから、うるさいなと思えるんです。恥を知っているから誇れる自分になろうとできるんです。なので、ネガティブな感情はポジティブを生むために必要だということ。それを表出する泣くという行為はとても大事ということですよ。

子どもに必要なのは、気持ちは受け止めて行動は導く。だから、「仲間外れにされてるねんとかって、あんたが悪いんじゃないの」じゃなくって、じゃあどうしたらいいかなと相談できる大人が必要なんです。

迷惑をかけちゃいけないとよく言われますけど、他者の安心、安全、自信を持って生きる権利を奪う行為が迷惑なのであって、頼ったり相談したり、泣いたり、つらい、悲しいは伝えていいんです。高校生の子どもたちが、相談するのは迷惑だと思っていましたと言っています。研修の感想にいっぱい書いてきています。「迷惑をかけんな」って言い過ぎです。

境界線を侵害することが加害です。体、時間、空間、性、持ち物、気持ち、考え方には境界線があります。子どもたちにもいつも伝えているのは、近寄られ過ぎて嫌な感じがしたら、「嫌」っ

て伝えていいんだよってことです。そして、「嫌」と伝えにくかったら、逃げてもいいんだよとか。「嫌」だと言われたら離れることはかっこいいんだよかも。保護者、先生、友達であつても不快な関わりは嫌だった、つらかった、悔しかったと自分の中の感情を認めていいんです。相手の明確な許可がないのに勝手に体に触れてはいけません。まずは相手に丁寧に聞いていきましょう。

子どもも親も加害者にならないために。私がいつも伝えているのは、家族はチームという考え方です。施設であつてもシェアハウスであつても、一つ屋根の下に二人以上の人間が暮らしていたらそれはチームだよと。我が家は、夫と長男は血がつながっていません。でも家族というチームです。このチームワークをよくするために、私はこの十五、六年、努力してきました、優しく丁寧な伝え方をしようとか、どうやったら仲よくできるかな、どうやったらこの一つ屋根の下が快適に安心、安全に暮らせるかなって。私はもう二度と自分が育ってきたような家にしたくなかったです。いつもびくびくしながら顔色をうかがいながら、ノーが言えない家にはしたくなかったです。

安心、安全、泣ける家庭、泣き言こそ分かち合えるのが、居心地のよい家庭です。家で泣けなかったらどこで泣くんですか。ファミリミーティングをぜひやってみてください。議題を決めて、否定、批判、駄目出し、説教、絶対にしないというルールで、議題の例は、楽しい「家」にするためにはとか、休日の過ごし方とか、スマホ・ゲームの使用についてとか、何でもいいですね。

これをやることで、要は日頃から何でも話せるトレーニングになります。子どもが性暴力被害にあつた時にでもです。いところから被害に遭つたとき、私、三日目か四日目に挿入されたんですね。一日目に助けてと言えていたら、挿入されなかつたんですよ、そういうことでしよう。

じゃあ、楽しい家にするために、我が家で決まった内容は、言葉の最後に「ニヤン」をつけてみるとかでした。ご飯ができたニヤン、宿題はいつするニヤン、ニヤンって言つたら何でも丸く収まる。優しく丁寧を常に意識する。何か物を置くとときも、バンって置くんじゃないかと、優しく丁寧に。椅子もばあんってするんじゃないかと、優しく丁寧に。そうしたら優しい空間ができるでしょう。できないってやらないのか、やってみようってやるのか、選べます。

あとは、肯定語で伝えようって事でした。「口を出すな」じゃなくて、「見守ってほしいな」って。暴力や暴言については毅然と淡々と「やめて」って。「くそばあ」と言われたら、「お母さん、くそばあじゃないよ、美しいお母さんやけん」って言つたらいいんですよ。「くそばあ」と言われて、「くそがき」って返さなくていいんですよ。

優しく丁寧な関係、スキンシップや感謝の気持ち伝えよう。特にスキンシップ、子どもによつては、本当に皮膚が過敏で嫌な子もいたりしますけども、スキンシップができるんだつたら、ハグでもいいし、手足のマッサージでもいいです、背中をさするのでもいいです。うちの子どもたちは頭のマッサージがすごくお気に入りです。十六歳の、髪の毛が青い次男君も、この頭のマッサージとか好きですね。

最後に、心臓から出る電磁波についてです。皆さんは今、心臓が動いていますよね。動いていない人、いませんか。この電磁波って一メートル離れたところからも計測できるんですけど。

やっぱりストレスがたまっていると乱れるんですけど、感謝の気持ちに転じた途端に整うという研究結果が出ています。だから、ありがとうって人に言ったら、自分の電磁波が整う。自分の電磁波が整うと血流が整って心拍が整って免疫力がアップして、健康に生きられます。さあ、今日から皆さん、簡単ありがとう健康法をやってみましょう。何か怪しい宗教みたいになっていきますね。というものの、やっぱりいらいらすることもあります。おやこひろば桜梅桃李、ホームページから見られますけど、いらいら、ぶんぶんを健全に出す方法という三分ぐらいの動画をユーチューブにつくっていますので、よかったら見てください。本当は今見せようと思ったんですけど、もう時間がないのでユーチューブで見てください。

ということ、悩んだときは周りの人や専門機関に聞こう。頼ったり甘えたりしていいということ、人とつながろう。性教育インストラクター養成講座とか、親子カウンセラー養成講座とか、Zoomでもやっています。さっき言いました「トラウマと共に生きる」、こちらのチラシも皆さんのお手元に配らせていただいています。このシンポジウムを二月に行いました。見逃し配信、今でもやっています。よかったら見てください。

ということ、泣いていいとよ、泣ける家庭、泣ける地域、泣ける社会を目指して、すみません、時間が長くなっちゃいましたが終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

○司会 とてもパワフルな講演、ありがとうございます。また、当事者として語っていただき、誠にありがとうございます。

質問がございましたらお受けしたいと思いますけれども、挙手いただけますでしょうか。

○質問者A 非常に深く広いお話だったと思います。学校の学科も必要ですけど、性教育も含めてこういう人間の生きていく力というんですかね、これが科目の中に入ってきて当然だと思いませんよ。現状はどういうことになっていますか。

○柳谷和美 ありがとうございます。先ほど七生養護学校事件ってお伝えしましたけども、ちょうど二〇〇三年ぐらいから、あの事件をきっかけに学校の現場の中で性教育が非常に後退してきました。現時点では、学校教育の中で性交は、いわゆる膣に勃起したペニスを挿入したら妊娠の可能性があるとか、性感染症になるとかは教えてもらえていません。なので、今は思いのある保護者たちが、個人的にとにかく伝えていかなくちやいけなという流れです。私の講座に来ていただいたりして。ただ、今は学校の現場の中でも、私の性教育インスタクター養成講座を教職員の方が非常に多く受講されています。ただ、やっぱり学校の全体を変えていこうと思うと、校長の意識だったり、市区町村の意識だったりの温度差があるので、なかなか今は難しいところですね。でも今日、お話を聞いていただいたように、本当に性教育って生きることにとっても大切なことなので、ぜひまた、一緒にそうやって学校教育の中にも組み込んでいけるような



声を上げていただければ非常にうれしいなと思います。ありがとうございます。

○質問者B ありがとうございます。本当に伺えて胸がいつぱいです。私もやはり昭和四十五年生まれの人間として、レンジャーとか戦いごっここの話がありました。私、気になってるのは日本のアニメ文化についてです。環境が人間をつくるということですけど、子どもが見ている通常のインターネットで本当に胸の豊かな、ペドフィリアにつながるような表現をされている女性が出てきます。表現の自由との関係で、ルッキズムというんでしょうか、本当に小さい頃から、女性の性表現のされ方にさらされて、日本はアニメの文化がすごく世界でも有名ですけど、子どもが受ける影響とか、大人の我慢とか、その辺りをちょっと教えていただけたらと思います。

○柳谷和美 そうですね、もうさっきアニメ、何とかレンジャー、何とかライダーの話でもしましたけども、今もう本当にインターネット社会で情報があふれているので、子どもたちが簡単にアダルトビデオとか、そういう動画なんかがすぐに手に入ります。フィルタリングをかけたところで、子どもたちはフィルタリング抜けが得意ですから。

なので、じゃあどうしたらいいかといったら、結局ぐるって回って正しい性教育を、やっぱりちっちゃい頃から年齢に合わせたというのが必要だと思えます。お勧め参考文献で「ゼロ歳から始める性教育」、オランダの性教育だったかな、そういうタイトルの本があります。この年代にはこういうことを伝えましょうとか。そういう情報があふれていること、間違っただけというのなんですから、ああいう表現、胸がばあんなってなっているのとかを見て気

持ち悪いなど思う人もいるんだよとか、そういったことを丁寧に、結局は家族というチームの中でオープンに話し合える環境を私たち大人がつくっていくしか今はないと思います。なくすのは多分もう、残念だけど不可能だと思いますよ、それを全部排除してしまうのは。

だったら、健康に生きるための性教育と、やっぱり性は、使い方を間違ってしまうと暴力になるというのを伝えることですね。暴力になったその結果、性的被害を受けた人たちがどれだけ苦しい人生を歩まねばならないのかということ、そういう意味では、私自身の被害体験もリアルなものとして、皆さんが伝えていっていただいたらいいかなと思うんですね。性暴力被害の人は、本当に死ぬまでお墓まで持つていくという人もいます。それも、当然尊重されていかねばならないことですね。ただ、私の場合はたまたまいろいろな環境が整っていて、夫もすごく応援をしてくれているので伝えられますけども、そういう意味では、こういうた当事者が、すごくしんどい思いになるんだよとかをやっぱり伝えていくことが、必要なんだと思います。

ちようどうち、二番目が十六歳で、友達とかが来ますけど、このおばちゃん、何でも話していると思ってるみたいで、友達が聞いてくるんですよ。この間も、「おばちゃん、フェラで妊娠するん」、どういう意味か分かりますか。フェラって口腔セックスのことですね。ペニスを口に入れたら妊娠するって、十六歳、十七歳の知識はそんなもんですよ。なので、地域に一人、何でも話せるおばちゃんがいるといいのかな。もつと言うと、やっぱり何でも話せる環境があるといのかなと思います。

やっぱり廻ったら、最後は性教育なのかなというところに私はたどり着いたので、自分で性教育をやっています。今ね、結構、性教育の意識が高まってきているので、いろいろな講座が増えています。インターネットで検索すると出てきますけど、性暴力被害に特化してお伝えしているのは私の講座だけです。なので、やっぱり使い方、だから包丁と一緒にすよね、使い方を間違えると人を傷つけるし、だけどお料理とかに使えばおいしい料理ができますよという。凶器にもなるし、とてもすばらしいものにもなるしっていう、そういうことを丁寧に子どもたちへ伝えていく。

それ以前に、自分たちがやっぱり自分たちを認めて誇れる自分、駄目駄目でもいいじゃないですか、めそめそ泣いてもいいじゃないですか、それでも生きるという選択を一瞬一瞬し続けているので、そんな自分をすてきなと思っていただけならなと私は思いますね。こういった今、皆さんいらつしやる間も、もう休みなく心臓も動いてくれてありがとうって、お目々も私を見てくれてありがとうって、ここにやってくる足さん、ありがとうみたいな。そうやって一人一人が何か自分の命を大切に思えるようになれば、性暴力被害は百年後かもしれない、二百年後かもしれない、でも、なくしていくことができるのかなと思います。百五十年ぐらい前に斬り捨てごめんとかやっていたのが今はないじゃないですか、それと同じように、二、三百年後、「二百年前には性暴力があったんだって」、「えっ、怖い」っていう世の中になってほしいなと思います。こんなのでよかったですでしょうか、ありがとうございます。

○司会　ありがとうございます。それでは本日、本当にお忙しい中ご講演いただきました柳谷さんに、もう一度大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、これで本日の講座「生きること」を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。ございました。

